

3月1日

昭和57年(1982) No.660

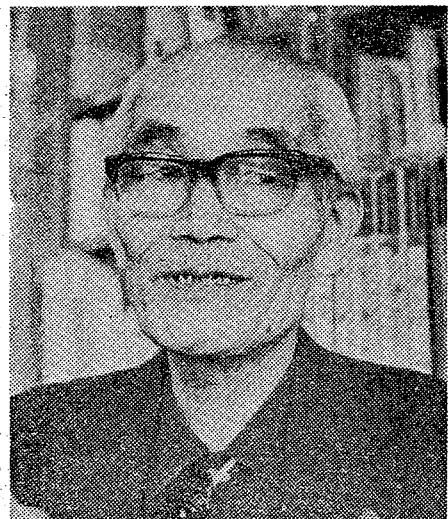
編集

越谷市役所企画部広報課

1日・15日
毎月2回発行

動くとからだが

温かくなるよ



立春が過ぎてもまだまだ寒い日がつづきます。葉を落とした木々の枝は早春の風にふるえています。元荒川沿いの土手も枯れた草に覆われて、まるで黄色いジュータンを敷きつめたよう。こんな寒さをよそに、大沢第一保育所の子どもたちが、今年も恒例の芝滑りにやってきました。ダンボール紙さえあれば、たちまちソリに早替わり。冷たい風の中で汗いっぱいに遊びました。

人生はドラマだといわれている。うぶ声と同時にその人間の配役は決まっていて、いつどこでどんなことをやり悲喜交々(ひきあわせ)の感情を味わいながら、いつどこで終焉(しゅうえん)となるか、それを知らぬのは人間自身である。どうかも知れない。

私の過去も文字通り波瀾万丈(はんぱんじょう)だった。そして主役の自分は明日の幸せを夢見、明日は判らぬ運命に挑(いど)んでいる。果敢ないとも滑稽とも進化したこととも言えるだろう。しかししながらどんな遭境にあっても必ず道が開けてくるということだけは不思議だった。

昭和三十六年九月上旬、私ははじめて越谷市の住人となつた。それまでは東京の下町に住んでいたが家庭的に不幸な事情が次々に起り、失意のどん底にあつた。

人生はよくじけなかつた。人生は七転八起だ、必ず立ち直れる信じた。そしてようやく健康を回復した。四十八年に縁あって市社会福祉協議会副会長として福祉業務のお手伝いすることになった。この間に長男長女はそれぞれ家庭を持った。そして孫も四人になつた。今私たち家庭は十九になつた。

私は昨年古稀を迎えたので市社協会員満退職した。しかし年ごとに越谷によらない愛着を覚える心が深まってきた。昔

風に言ふと、人生五十年の終点からスタートした一人の男のどうした人生航路の終着に近づいたせいだろうか。

越谷生活二十年の感懷

晉町二六の九
夢沼
亥次郎(70歳)

越谷とわたし

89 ◇◇

「越谷とわたし」は、あなたのコーナーです。みなさんの投稿をお待ちしています。字数は900字程度です。

広報課

市税10期分の納期限は
3月31日(水)です。納
期限内納付にご協力くだ
さい。

